子どもの遊びに見られる象徴的表現についての一考察

—玩具を水に流すこと—

○三枝 桃子 (愛育学園) 佐治 由美子 (愛育学園)

【はじめに】

子どもの遊びの中には、大人にとって止めたくないような、理解し難い行為が度々見られる。本事例の玩具を水に流すこともその一つである。令和6年度4月からSは幼稚園から1年生へと進級し、学園での生活環境も変化した。ウルトラマンが大好きなSは、毎日家からお気に入りのフィギアを持ってくる。どのような活動をしていても、ウルトラマンを片時も手離さない。Sが安心して過ごせるように、教室にはたくさんのウルトラマンフィギアや怪獣が並べられており、4月はほとんどそのスペースから動かずに遊んでいた。そんなSが、庭にある水道の排水溝を見つけ、お気に入りのフィギアを流したところから始まった流すという遊びを、Sがどのように体験していたのか考察を加えていきたい。

【方法】

愛育学園(特別支援学校)の日々の保育の中で、Sがフィギアで遊ぶ場面を事例として取り上げ考察を加える。筆者は令和6年度から非常勤講師として週1.2回保育に入っており、Sとも深く関わるようになった。

【倫理的配慮】

本研究については、学校長の承諾を得た後、対象児の保護者に対して研究の目的や内容、個人情報の取り扱いについて書面と口頭で説明し、同意をいただいた。

【事例と考察】

事例1 フィギアを水に流す 令和6年5月

Sは片方にウルトラマンオーブ、もう片方に仮面ライダーのフィギアを持っていた。表庭にある水道の排水溝を見つけ、ウルトラマンを投げ入れた。少し声色を高くして「行ってくる！」と言うと、ウルトラマンを排水管の方へ流した。筆者が「あー！どこ行っちゃったの！」と言うと、Sはケタケタ笑った。再び「行ってくる！」と言って仮面ライダーを流そうとしたので、筆者は排水溝に蓋をした。「オーブは

海に行っちゃいました」と伝えたが、その後Sは何度も「オーブ、どこ行っちゃったのー」と声を張り上げていた。

考察1

自分の分身のようにして片時も離さなかったフィギアをSが手放した印象的な場面である。筆者は、それほど大切にしているフィギアを流してしまっただけでなく、戻ってこなくなってしまうことを懸念し、二度目に流そうとしたときに排水溝に蓋をしてSを止めた。しかし、流す前の張り切っている姿や、流した後でも笑っている様子から、Sにとって「流すこと」と「失うこと」は一致していないのではないかと考えるようになった。フィギアが流れていなくなってしまうことを伝えてもひたすら探し続けるSは、「流すこと」を別の視点から捉えていると推察する。

事例2 フィギアを取り戻す 令和6年6月

この日のSは、裏庭の側溝の穴を見つけると、そこにウルトラマンを落としケタケタと笑っていた。手の入らないほど細い穴の向こうは真っ暗で何も見えない。Sがもう一つのウルトラマンを手に持ち、声色を変えて「今、助けるね！」と言ったため、筆者は棒やひもを使って釣り上げる作戦を提案した。Sは声をあげて笑いながらウルトラマンの手に棒を持たせ、見えない穴の先にひもを垂らし、落ちたウルトラマンを救おうとした。しかしウルトラマンを救うことはできなかったため、別の保育者に相談したところ、側溝を開けてくれることになった。重い側溝を開けると、そこにはしっかりウルトラマンがいて、無事にSの手元に戻ってきた。筆者は「Sくん、よかったね！ウルトラマンいたね」と声をかけたが、Sは何も言わず、落としたウルトラマンを握りしめていた。

考察2

事例1でフィギアを一つ失くしたにもかかわらず、一切躊躇せずに再び先の見えない穴に落とすSの様子が印象的な場面である。「今、助けるね!」という言葉に、筆者は事例1のことを思い出し、もう一つのフィギアの動きを変えてみようと考え、釣り上げる作戦を提案した。声をあげて笑っている様子から、Sがフィギアを救うことを楽しんでいるのがわかる。側溝にひもを垂らすSの心の奥に、真っ暗で細い穴に入るワクワク感や、その先に広がる見えない世界に入り込む楽しみがあることを発見できる。側溝を開けることにしたのは、フィギアを釣り上げられる気配が全くせず、開けて取り戻した方が早いと筆者が判断したからである。喜ぶSを想像して声をかけたのだが、Sの表情は明らかに釣り上げている時の方が晴れやかだった。このことから、Sはフィギアを取り戻したという結果よりも、そこに至る過程を楽しんでいることがわかる。筆者は、落としてしまったフィギアを取り戻すことがSにとっての達成だと思い、側溝を開けた。一般的には「落とすこと」は「失うこと」であり、子どもにとって消極的な体験とみなされることもある。それに対し、「落とすこと」を戻ってくるために必要なこととして捉え、戻ってくることの手応えを自ら得ようとする遊びであるという見方をすると、そこにSの自己実現が存在していることがわかる。本事例において、側溝を開けてフィギアを取り戻した筆者の行為は、「落とすこと」と「戻ってくること」の過程に意味を見出すというSの自己実現の体験を奪ってしまったと考える。

事例3 フィギアを探す 令和6年10月

Sは家からウルトラマンタイガを持ってきていた。タイガの合体に必要な一つがウルトラマンオーブであったことから、過去に流してしまったことを思い出し、「探さなきゃ!」と言って表庭の水道に向かった。Sはタイガを排水溝の中にぽちんと投げ入れ

た。排水管の入り口にタイガを突っ込み、シャワーの水を当てて流そうとした。筆者が「オーブ、いた?」と声をかけると、Sがニコニコしながら声色を変えて「いないよ〜」と答えた。別の保育者が「Sくん、タイガ流したらいなくなっちゃうよ」と止めようとしたが、「やめて!いいの!」と水を当て続けた。しかし、結局この日もオーブが見つかることはなかった。

考察3

事例2でSの自己実現の形を発見した筆者は、一度目に流れてしまったフィギアと、再び流そうとしたフィギアが見えない世界で繰り広げるやり取りを想像し楽しんでいるSの側に立って遊びを共にすることにした。肌身離さず大切に持っていたフィギアを、流すという形で手放すことは、固執しているものを手放し、「失うことにより、本来の自分を発見」¹する体験となっているのではないだろうか。長い間分身のように片時も離さず持っていたフィギアを手放すことは、自分の一部がなくなるような体験でもあり、そう容易に受け入れられることではない。Sは、流したフィギアを取り戻す過程に、フィギアから離れる葛藤を投影していたと推察する。自ら流したフィギアを必死で取り戻そうとしているSの行為は、フィギアと一体化した関係から脱却したい気持ちと、一人の人間として独立する恐怖や心配とで揺れ動いていることの表現であると考えられる。そのように捉えると、見つからないまま終わった体験はSにとって、フィギアと離れ、それぞれ独立した関係性へと発展する体験になったといえる。

【おわりに】

本研究では、玩具を水に流すという子どもの遊びに目をとめ、自ら手放したものを取り戻す過程の中に、人間として独立する葛藤を投影していることを示した。Sの遊びは現在も続いているため、今後もその意味を問い直していきたい。そして、保育者がつい止めたり、結果を急いだりしたくなる時こそ一旦立ち止まり、子どもと共に過程の中に意味を見出す日々をこれからも重ねていきたい。

¹ 津守真,『保育者の地平』,ミネルヴァ書房,1997,p133